

す みみ たぶ
透けた耳朶
重兼芳子



透けた耳朶
重兼芳子



新潮社

透^すけた耳^{みみ}朶^{たぶ}

定価九八〇円

昭和五十四年七月三十日 印刷

昭和五十四年八月五日 発行

著者 重^{しげ}兼^{かね}芳^{よし}子^こ

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七十一番地

電話 東京(266)五一二一(業務)

東京(266)五四二一(編集)

振替 東京 四一八〇八千一六二

印刷 東洋印刷株式会社

製本 大口製本株式会社



乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えます。

透けた耳朶／目次

水位 5

ベビーフード 51

髪 93

同居人 149

透けた耳朶 195

あとがき 244

装画／山本容子

透けた耳朶

水

位

足の甲が、ぷくつとふくらんだ赤児の足。めくれた着物の裾を、盛に蹴っている。着物がすっかりめくられて、おむつまでが露わになったとき、誰かがみつけたのだった。

足指の、豆粒ほどの爪が、紅色のペディキュアで塗られていた。そして、駅のベンチに捨てられていた。十本の足指の紅色が、あまり鮮かな色だったので、拾った人は怖る怖る抱き上げたそうだった。

その駅は、「伊達^{だて}」という駅であった。交番のお巡りさんに保護されて、わたしは施設に送られた。捨てられていた駅の名を名字に、市長さんの名から一字をもらって、名前がつけられた。

伊達一子というわたしの名前のいわれを聞いたのは、ずっと大きくなってからのことだった。着衣の特徴の記録のところには、女物のガーゼの肌襦袢に、浴衣の袖を千切ったおむつを着用と書いてあり、推定生後一カ月から二カ月の間とあった。両足指に丹念にペディキュアが塗られ、発育は中、骨格が標準以上に大きいというのが、わたしを育てた施設の記録に記載されてあった。

中三を卒業して、それまで養われていた施設を出るときに、園長が見せてくれた記録であった。何度も読み返すわたしに、

「だから一子の帰ってくるころは、ここなんだよ。ここしか無いんだよ」

と、園長が言った。そして、わたしの両肩に手を置いて、「いつでも帰っておいで」と念を押した。

赤ん坊だったわたしの足の爪を、ひとつずつ丹念に塗り潰した人が、わたしを捨てた親なのだろうか。その人を恋しいと思うには、あまりにも輪郭がぼけていて、豆粒ほどの紅色がひらひらするばかりである。

施設には、同じような境遇の友だちがたくさん居たし、食べものも豊かにあった。毎食、子供たちの食べ残しがバケツに捨てられ、近所の養豚屋が取りに来ていた。

大きい子が、小さい子の世話をするように仕付けられていた。育つにつれ自分の親が無いことを忘れて、小さい子に親の無いことが可哀想に思えた。それは、わたしだけではなく、大きくなった子は、こまめに年下の子の面倒をみた。わたしは、体を動かして働くことは苦にならない。

女中という現在のわたしの職業は、とても性に合っていて、やっと適性の仕事をみつけたと思っている。園長の世話で、準看護婦になるための学校へ行ったり、洋裁屋のお針子になったこともあった。しかし、どこでも永続きはしなかった。何の資格もとれないのだからと止められたが、わたしは女中になってよかったと思っている。

それに、わたしを雇ってくれている主人夫婦が、穏かな人柄である。雇われてから半年にな

るが、今度こそ永く居られそうな気がする。

わたしの雇い主は、役所につとめている。といっても、河川管理の工事事務所の所長さんである。中国山脈に源を発し、瀬戸内海に流れ入る河の、堤防のこわれたのを直したり、必要なところに橋を架けたりする仕事である。住んでいるのは官舎で、河の土堤の外側に、土堤に寄せて建てられてある。

官舎の少し川下の方角に、巨大な橋が架けられようとしていた。わたしが来たときは、すでにおおよその工事は済んでいた。しかし、まだ溶接の火花が散ったり、鉦打^{びやううち}ちの金属音が響いたりしていた。今では、すっかり音も止み、工事は塗装の段階まで進んでいた。

瀬戸内特有の夕風^{ゆうなぞ}で、風が全く激^{よど}んでしまった夕方であった。わたしは、土堤に上って、河面を渡ってくるわずかな風に吹かれていた。水嵩を増した河の広やかな眺めを見ながら、両手を上げて大きく伸びをした。

河は動いていなかった。この辺りは、河口近くである。二つの支流が合流するちょうど東の辺にあたるので、河幅が急に広くなっている。水面がきららかに反射して、流れが動いているようには見えないのだった。

完成前のアーチ橋の、錆止めに塗られた朱色の鉄肌が、向う岸まで伸びていた。三百米はあろうか。取り付け道路はまだ砂利のままで、舗装のためのセメント袋が、道の端に積まれてあった。鉄骨の切れ端が転がり、錆びた小型のクレーンが放ってあった。

アーチ橋を支える弧状の橋桁^{はしげ}の天辺に、黒いものが見えた。とっさに黒い鳥だと思った。大

きな朱色の止り木に、黒い鳥が翼を休めて止っていると思った。ずっと黒い鳥が立ち上った。人影だった。河面からの高さは、七階建てのビルの高さほどもあるうか。

その人影は、命綱もつけずに橋の弦側板を渡ってくる。朱色の弧状の鉄板を、こちら側に向かって降りてこようとしていた。

わたしは、眼をこらして黒い人影を確めようとした。高くて遠い上逆光なので、影のままこちらに降りてくる。地面を歩くよりずっと軽やかに、夕陽を背にして近付いてくる。

橋の弦側板は、三十糎幅ほどしかない。危険な傾斜を何のためらいもなく、はずむようにこちらに近付いてくるのだった。

知らない顔であった。工事事務所の職員でもなさそうである。職員ならばヘルメットをかぶるように義務づけられているし、橋桁に乗るような危険なこととはしない。

その男は鳶の人がはくような、膝から上が横にふくらんだズボンをはいている。それに、黒シャツ地下足袋ばきであった。すっと通った鼻筋は、鷲鼻までいかない危いところで止まっている。男の人にしては長い睫毛まつげの奥に、瞳みまったような眼があった。服装とは対照的に、あまい顔をしていた。足音も立てずに橋桁を降り切ると、わたしの前を通り過ぎて行った。尻が締まって、ズボンがきつちりとくいこんでいた。風が吹き抜けるように、その男は行ってしまった。

わたしは、所長さんにも奥さんにも気に入られていた。特に奥さんはわたしを女中としてよりも、頼りになる同居人という接し方してくれる。臨月に入って、予定日も間近な大きな腹を抱えているからだろうか。

所長さんや奥さんの気質を素早く見てとって、わたしは、先廻りして二人の好みに合うよう

に働く。周囲に合わせてゆくのは、わたしの身に備わった性質である。生まれつきのものなのか、育った環境によるのか、身の処し方が特に敏捷なのである。ときには卑しい感じを自分に抱くことがある。

眉毛が黒くて、鼻の穴の大きい保母さんがいた。性格や、年齢を考えて組み合わされた六人の部屋で、わたしたちのおかあさんと呼ばれていた。おかあさんは、片付けることが大好きな人で、整理整頓することが、子供の躰だと考えていたらしかった。

おかあさんが部屋に入ってくると、わたしは直ぐに立ち上り、とにかく物を片付ける振りをする。わたしに当てがわれた半間ほどの押入れに首を突っこみ、衣類の整理を始めたりする。こうして物を整理する姿勢を見せることが、何よりもおかあさんを落ち着かせることを知っているからだ。おかあさんが穏かな顔をしていると、わたしは安心することができるとにかく片付けることだ。

鈍い子供が、畳の上に玩具や教科書を放り投げたままにしている。おかあさんは、横眼で見ながら黙っている。口やかましく叱ることを、おとうさんである園長から禁じられているからだ。

持主が気が付いて片付けるのを、おかあさんは待っている。そのうち額の静脈が青く浮き出て、鼻の穴がふくらんでくる。持主の子供を険しい眼でみつめる。

わたしには、そのような時間がとてもつらい。玩具の持主の子が早く気がつくように、押入れの中の箱の蓋を、わざとに大きな音をさせて開閉したりする。

彼女は、わたしが小学校三年生のときのおかあさんだった。

部屋の保母さんは、一年交代で変ることになっていた。短大出たてで、保母の資格を取ったばかりの人が、わたしたちのおかあさんになったことがあった。おかあさんは卒業論文を書くときから、わたしたちの施設に実習に来ていた。それが契機となり、一生を恵まれぬ子のために奉仕しようと決心したそうだ。

色が黒いので、わたしは子供たちから「クロ」と呼ばれていた。顎の長い子は「アゴ」であり、眼が細くて眠っているような眼をした子は、「眼クソ」だった。おかあさんは、

「その人の責任でなかったのではない特徴を嘲るのはよくないわ。そうでなくても本人が一番つらいのよ。からかうのは、止めましょう。愛というのは、思いやりなのよ」

と皆をたしなめた。おかあさんがその度に禁じるので、わたしは「クロ」と呼ばれなくなった。しかし実際に色が黒いのである。わたしは呼ばれなくなってからの方が、色が黒いのを意識した。おかあさんは、

「雲が恥かしいと顔を赤らめているでしょう」

と夕焼けの空を指した。切り花にしようと、庭のチューリップを花鋏はなばさみで切りながら、

「お花痛いでしょうけど、ごめんね。子供たちを慰めるためにがまんしてね」

と首を傾けて言った。グリム童話やクラシック音楽を聞かせて、わたしたちの情操教育をした。

わたしは、退屈なクラシック音楽を、おかあさんのために辛抱して聞いた。部屋の中が乱雑に散らかっていても、おかあさんは、あまり気にしなかった。

わたしに当てがわれた半間の押入れは、めったに整理されなくなり、汚れた下着が、たくさん詰め込まれた。

「虫の聲が、濡れた草の上をころがってくる」と、おかあさんに見せることになっている日記に書いた。おかあさんは喜んで、

「一子ちゃんは、豊かな心になったわね」

とわたしを賞めた。わたしは、ほんとうに安心することができた。

奥さんは、米俵を抱えこんだような腹をしている。体がけだるそうで、その上退屈そうで、台所で用事をしているわたしの後に、べったりと坐り話しかけてくる。

「十カ月、こうしてわが身の内に入れて、産まれるのを待っていると、いとしいものね。まだ顔見ていないのに、可愛くて、可愛くてたまらないの」と言う。

「一子さんの親って、可愛くなかったのかしら。ほら、こんなに動くのに」と腹をさする。拡げて坐った腿の間に、尻を落とし、手で大きな腹を持ち上げるように抱えている。マタニティドレスの前が止らないのか、ボタンが三個はずれている。

胃のあたりの肌に、薄茶色の妊娠線が、はずれたボタンの陰から見える。下腹のあたりがもち上っているのは、幾重にも巻いた腹帯が、ゆるんでたぐり落ちたせいだろう。

「動いている。動いている」

奥さんは、わたしの手を取り、自分のふくらんだ腹の上に持っていくた。

「ほら。この辺が足なのね。盛に蹴っているでしょう。ちっちゃな足でしょうね。もうすぐここにちはね。一子さん。あなたも嬉しいでしょうね」

と、むくんだ顔を上に向けて、うっとりとした。

奥さんの実家には、祖父母、両親が健在だそうだ。その上、近所に母方の祖父母も住んでいるという。奥さんの母親は、次々に老人病にかかる親たちから手が離せなくて、まだこちらに來られないでいる。一人娘で育った奥さんは、六人の大人に注目されて、「もう愛情なんて、うんざりよ」と口癖のように言う。

「家の中に一匹でも蠅が飛んでくるとね、大人の誰かが、アルコール綿で止まったあとを拭いて廻るのよ。他の大人は蠅叩きを持って大騒ぎするの。雨が降ると、誰があたしに傘持つて行くかで、嫁と姑がけんかするの。あたし、誰からも可愛がられなかったら、どんなにせいせいするかしら。一子さんのように、係累がいなくて、羨ましいわ」と言った。わたしの給金は、母方の祖父母からの贈りもので、毎月奥さん宛に現金封筒が届く。

「何か名目つけて、あたしに呉れたがってるのよ」

奥さんは、受取りの判を押しながら、わたしをふり返って言う。

わたしは台所で、出盛りの枝豆をゆでていた。北向きの勝手口から風が吹き通り、ガスの火が揺れた。先刻帰宅した所長さんが、「ビール、ビール」と大きな声で催促した。所長さんは、本省採用の若い技術屋さんで、橋を架ける専門の勉強をしたということだった。

奥さんは、わたしに言うときよりもしつこく、

「ねえ。動くでしょ。ほら、動くでしょ」

と所長さんにあまえた。所長さんは、奥さんの腹に触った手を振るようにして、「ビール。ビール」と、てれ笑いするのだった。